

土地

パクキョリ

朴景利

3

安字植 訳

福武書店

土地

3

福武書店

土地

③

一九八三年五月二五日 第一刷印刷
一九八三年五月三〇日 第一刷発行
定価 一一〇〇円

著者 朴景利

訳者 安宇植

発行者 福武哲彦

発行所 株式会社 福武書店

東京都千代田区麹町六六 一〇二
電話(〇三)三〇一二三

振替口座(東京)六一〇五〇九七

印刷・製本 大日本印刷株式会社

© PARKKYUNG RI 1983

シリーズコード ISBN 4-8288-2041-8

土地コード ISBN 4-8288-2035-8 Coorg

落・乱丁本はお取替え致します。

土地
3
——
目次

第二篇 追跡と陰謀〈承前〉

3章 失敗

8

4章 空と森と

37

5章 うたかたの恋

60

6章 陰陽の道理

82

7章 暗示

103

8章 狼藉

118

9章 過去の鏡に映った風景

140

10章 はるかな黄泉路^{よみじ}

11章 黄金の虹

12章 子授け堂の情事

198

179

158

装丁菊地信義
カバー絵提供 韓国文化院

土地

3

第二篇

追跡と陰謀 （承前）

3章 失敗

借りものの奴僕にせよ顔立ちがととのっているうえ、大家に仕える家僕としての風格がそれなりに身についている三守が手綱を取る驢馬の背にまたがり旅をするのであったから、金平山の機嫌が悪かろうはずはなかった。路銀もたんまりあった。日照りつづきで砂をふくんだ風が吹きつけたが、空はこよなく澄み渡り、雲一つなく清らかで明るい旅日和であった。馬鈴がのどかに野面に響き渡った。川の流れば風を受けて白っぽく波を立てていた。

崔致修^{チオエチス}の遣いで旅にでることなど屋敷の門をでた瞬間から綺麗さっぱりと忘れてしまっている平山は、八道江山^{パンドガシサン}（かつて朝鮮半島は行政区画が八道に分かれていた。道は県に相当し、江山は山河）を物見遊山の旅にでかける風流な旅人さながらに猪首を伸ばして顎を突きだし、失われた尊厳を取り戻したかのごとく鷹揚に振舞って見せた。

——通鑑（『資治通鑑』）のこと。宋の司馬光によって完成された周の歴代君主の事跡に関する記録）の幾らかは紐解いてみないでもなかったが、あの類の書物ほど虚しいものは他にあるまい。ほぼ二十年を越えるこんにちまで書冊^{シヨマウ}とは縁遠い暮らしじゃったから、明き盲も同然のありさまとなつてしまったが、いやはや。

やれ狗^グの脚出身^{グシ}よと蔑まれる境涯にある身で、いまさら学問に打ちこみ科擧でもと考えている

わけではなかったが、驢馬にまたがり従者までしたがえてみると、有識が兩班ヤンバン（朝鮮「李」王朝時代の家柄や身分の高い上流階級のこと。東「文」班と西「武」班の総称で日本の士族に相当）としての身分を支える必須条件であることを、痛切に感じさせられるらしかった。これまで彼は、自分が無学であることを嘆いた覚えは滅多になかった。村で学識があると評判の金訓長に対しても、敬意を払ったことはなかった。

——士大夫の娘に生まれたとでも思っておるのか、この思い上がり者があ。学問など何の役に立つとぬかすのじゃ、そんなものは狗の脚に真珠よ、真珠。人間はおのれの分際を弁えなければ、長命をまっとうできんのじゃ。

わが子に文字を教えることもとする威安宅ヘアンヂをこのように悪しざまに罵るのも、多少の学問を身につけている妻への嫉妬からではなかった。中人チュンイン（朝鮮王朝時代の兩班階級の次に位置する階級。もっぱらソウルに住み計理、氣象觀測、訳官、医官など技術的で下級の職務に従事した）出身の分際で貴様ごときが、片腹痛いわいといった気分からであつた。

金平山における兩班と中人という身分意識はすこぶる厳しく、いきおいそれに根ざした妻への優越感もまた根づよかった。それだけに、自分より格段に高い崔致修の身分に対する劣等感もまたすこぶる強かったといえるかもしれない。しかし、ともあれ彼はいまたいそう上機嫌であつた。機嫌がよかつたからその昔、まだ幼いころ訓長（漢文私塾の教師）の前で上半身を前後にゆさぶりながら書冊を読み上げたことを思いだしたのであり、何冊かの通鑑程度で学問に見切りをつ

けたことが悔やまれたのである。

彼らの道中は遅々としていた。次の村にたどりついて酒幕（居酒屋）が眼に止まるたびに、平山は三守に足を休めて行くことを命じたからである。肥満した体が照りつける陽射しに耐えがたかったからにちがいないが、彼の性分としてもやはり酒幕を見て素通りはできないらしかった。路傍の酒幕に立ち寄るたびに、平山は博奕打ちならぬ両班として鄭重に扱われた。お世辞にも立派な顔立ちとはいえなかったが色艶がよかつたうえ、労働というものを知らない体軀からはどことなく気品めいたものが感じられたし、唸れ声もでっぷりと肥満したその体軀が感じさせるおぞましい印象を少なからず柔らげてくれた。

彼自身はそれとして、しかし大家の家僕として板についている三守の威力のほうがより多くの効き目を現わしたにちがいなかった。両班どもの首が秋風に木の葉が舞い落ちていくように斬り落とされたという東学の乱が吹き荒れ、過ぎ去った地域ではあるがそれでもまだ、常民（サンミン）たちの両班に対するほとんど本能に近い畏怖の念は残されていた。立ち去った後で平山の滑稽千万な相好に対してあれやこれやと陰口をたたくことは絶えぬはずであったが、ともあれ酒幕の女たちはいずれも慇懃な物腰で扱ってくれたし、客たちも目くばせし合って席を譲ってくれたりした。

——ふん、他人の牛蒡（ゴボウ）で法事がでけるというけんど、いい気なもんじゃ。

街道脇などで足袋（ゴッセン）の土を払い落しながら、三守はいまいましげに何度も平山のほうを見上げたものである。

陽がほとんど落ちるころになって、平山は三守に求礼^{グレ}へ向かおうといいだした。

「何ですとお」

「わしは求礼へ行きたいといっておるんじゃないよ」

「山へは行かんと求礼へ行ぬるといいなさるんで」

「求礼へ行けば消息を知る手があるから、そういつとるんじゃないよ。ひよつとしたら求礼に立つ明日の市で、獵師^{ガク}の姜爺^{ヤジ}に会えるやもしれんしな。とりあえず求礼へ行つてから先のことを決めるとせんかね」

釈然としない表情であつたが、三守はいわれるままにしたがつた。

求礼へ到着するや平山は市の立つ通りの脇にある客主家^{グクジュジン}（商人宿）に泊まることにした。明日の市をめざして各地からやってきた担い商人たちで賑わっている客主家であつた。恰幅のよい客主家の女主人は、臼を想像させる腰に大きな巾着をさげていた。驢馬を預けてから、ようやく手足が伸ばせる程度の狭い部屋へ案内された平山は、壁にもたれてしたり落ちる汗を拭つた。

「その窓をちよつと開けてくれんか」

三守はいよいよいまいましさがつつのり、染みだらけの背後の壁の窓を荒々しく開け放つた。

「三守よ」

「今度はどがいな用事かのう」

「お前というやつは底抜けの愚か者よのう。いつまでに戻ると日限を約束してあるわけでなし、

結構な口実ではないか。休み休み旅を愉しみながら帰ろうとするのがそんなに気に入らんで、不貞腐っておるのか」

「……………」

「これもお前との誼よしみを考えて、そのように取り計らってやろうとしておるのに」

「誼よしみといいなざると」

「貴様の親父じゃよ」

三守の顔色が変わった。

「貴様の親父をよく存じておってな。齢はわしのほうが三つ四つ若かったはずじゃが……崔氏一族のために骨身をすり減らしてまで働くことなどないわい。だから何をどうせよというのではないが、貴様の祖父にしても誰にも退けをとらんくらの忠義者じゃったが、とどのつまりは首をくくってあの世へ旅立つ破目になったし、貴様の親父は哀しみに明け暮れたものじゃ」

三守は一言もいい返そうとはしなかった。彼自身すでに知り尽くしている事実であつた。

部屋の外が騒がしかった。女主人と酒を飲みにきた客との間で、こんな馬鹿げたことがあつてよいものかと互いに遣り合う声が飛びこんできたし、食膳を運ぶ女中の足音が聞えてきた。平山は冠、網巾アソビ（馬の毛で網状に編んだ帯状の頭巾。封建時代の男は髻を結ったから、毛髪が散らぬようこれを用いた）、道袍ドウポウ（外出用コート）などを脱いで壁に掛け、部屋の外のざわめきに浮かれたように笑みまでふくんだ。

「今夜はここでせいぜい愉しむことじゃ。明日にでもんびりと発てばよからう。蟹のように山をほつつきまわっておる姜爺カンをひと思いに探しだして帰るじゃろうとは、貴様の主人も考えてはおるまいからな」

依然として黙りこくったきりであつたが、三守の表情から平山をいまいましく思う気配はそれまでより薄れていた。

夕飯を断わり酒場のほうへでてきた金平山は、いかにもすっきりした表情で盃を傾けていた。いっぱしの両班として振舞うのも満更悪くはなかったが、鬪戔トウジヤン（昔の賭博の一種）の愉しみのほうがなおのこと捨てがたく思われた。鬪戔場では両班と常奴サシヌム（常民の蔑称）の区別がなかった。いや両班の格式ばった衣冠や言動などは、かえって煩わしいくらいであつた。平山は盃を傾けながら鬪戔場が開帳される時刻に備えて、旅の疲れを癒しているところであつた。一隅では担い商人たちと、自作の田畑の幾らかもっていると感じる農民とがいつしよになつて、言い争っていた。初めは、全羅道出身の担い商人と慶尚道出身の担い商人とが、計算の間違いがもとで口論をはじめたものと思われたがさにあらず、もはや故人となつてしまつた大院君デウオンクンと閔妃ミンピとを肴に、自分の言い分が正しいと言い張つて互いに譲らず、口論しているところであつた。

「さあ、そこじゃ。考へてもみんなそれや。なるほど女子にや違えねえとも、チマ（韓国服のスカート）をつけとるけん。じゃけんどありきたりの女子と違ふとるげな。そりや、そうじゃらうて、私家でいうたらお舅じゃもの。じゃけんど私家のこととは事情が違ふとるげな。お国のことじゃ

て、お国のこと。それを毫碌して頭の惚けとる爺が、倭奴オエノム（倭人つまりは日本人の蔑称）の手先なんぞになり下がりがあって、国母を亡き者にするんかの。ちよつこら考えてもみんなそれや、女子の身じゃがそんなじよそこらのしつかり者と違ふとるけん、倭奴が亡き者にしておつてじゃろうか。倭奴と聞くだけでびくびくしおるご時世じゃのにどれくれえ胆つ玉が坐つとつてじゃろうか。なんぼ権勢に眼がくらんでおつたからいうても、そがいな犬畜生にも劣る倭奴どもに担ぎだされて王宮へ乗りこむなんぞ、許されることじゃろうか。それまでの経緯はどがいになつとつてじゃろうと、私家においてさえ嫁を倭奴の手に渡すなんぞでけんことじゃのに、国母の身分にある手前の嫁御を倭奴に手渡そうなど、口が裂けたつていわれんことじゃ。まして国の体面を考えたら、そがいなこたあでけんじゃろうに」

男の一人が大きな眼の玉をぎよろつかせながら言い張つた。

「ふん、そのお舅を大國デグク（清國）の奴らに手渡したのは、どこの誰かの」

慶尚道出身の担い商人が遣り返した。

「そがいにいうがの、ほんまじゃ、そいつは事情が違ふとるげな。清國いうたら、つまりはわしらのご本家筋じゃろうがの。ずつと昔からそがになつとるげな。まったくの犬畜生と交わらん倭奴と比べることがでけるじゃろうか。ご本家筋じゃけんあがいな毫碌爺じゃろうと清國へ行んでさんざん遊山してまわつた末に、無事に帰されとるげな。ところが、大昔からわしらの前にひざまずきおつた倭奴はどうじゃ。わしらの喪服なんぞもろうて帰つてきやつらの着物をこさえと